

熊本県IPM実践指標【茶】

	管理項目		管理ポイント
	対象	技術	
環境・樹体の整備	病害	適正な品種の選択	炭疽病や輪斑病の常発地帯において、改植・新植する場合は抵抗性の強い品種を導入する。
	虫害	適正な品種の選択	クワシロカイガラムシの常発地帯において、改植・新植する場合は抵抗性の強い品種を導入する。
	病害	ほ場周辺の環境改善	炭疽病やもち病の多発地帯では、ほ場が陰湿にならないよう可能な限り周辺の林木を伐採したり、枝管理を行う。
	虫害	ほ場周辺の環境改善	ツマグロアオカスミカメ等の害虫の増殖・飛来源となる雑草や樹木を除去する。
	雑草	雑草の種子生産の抑制	種子で増殖する雑草の発生を少なくするために、結実前に除草を実施する。
防除要否及びタイミングの判断	共通	病虫害発生予察情報の確認	病虫害防除所が発表する発生予察情報入手し、確認する。
	共通	病虫害発生状況の把握	定期的にはほ場を見回り、病虫害の発生状況を観察及び確認する。
	雑草	雑草の観察	ほ場と周辺の雑草の状況(草種、発生量)を観察、把握する。
	病害	炭疽病・もち病	伝染源の密度や感染期の降雨状況さらには品種の抵抗性を考慮し、適期防除に努めるとともに過度の防除は行わない。
	病害	輪斑病	摘採あるいは整枝した翌日までに防除する。やぶきたなど本病に弱い品種以外は防除をしない。
	虫害	ハマキムシ類 チャノホソガ	地域内あるいは近隣地域に設置された誘蛾灯やフェロモントラップの成虫誘殺状況を確認し、適期防除に努める。チャノホソガは新芽への産卵状況を確認する。
	虫害	チャノミドリ ヒメヨコバイ チャノキ イロアザミウ	新芽生育期の発生状況を把握し、適期防除に努める。
	虫害	ハダニ類	葉裏を観察し、発生密度を確認する。また、発生状況と気温・降水量の推移に留意し、急増する前に防除を行う。
	虫害	クワシロカイガラムシ	有効温度積算法や粘着トラップ法等により幼虫のふ化最盛期を確認し、適期防除に努める。
	虫害	チャトゲコナジラミ	すそ部の葉裏を観察し幼虫の成育ステージを確認する。また、黄色粘着トラップ等により成虫の羽化最盛期を確認し、適期防除に努める。
生物的防除	ハマキムシ類	性フェロモン剤の使用	性フェロモン剤を団地単位で積極的に導入する。
	チャノホソガ	生物農薬の使用	病原性ウイルス剤(GV)やBT剤を使用する。
	カンザワハダニ	土着天敵の保護	BT剤を使用する。(葉縁潜行期まで)
	クワシロカイガラムシ チャトゲコナジラミ	土着天敵の保護	寄生蜂等の天敵への影響が大きい農薬の使用を控え、その活動を保護する。
物理的防除	赤焼病	防風ネット	強風による発生を軽減するために、防風ネットを設置する。
	炭疽病 輪斑病	せん枝	発生が多く、三番茶を摘採しない茶園では、二番茶摘採後に深刈りを実施し、伝染源を除去する。
	クワシロカイガラムシ チャトゲコナジラミ	せん枝	多発茶園では一番茶摘採後に中切り更新し、寄生部を除去するとともに樹勢回復を図る。
	鱗翅目	黄色高圧ナトリウムランプ	鱗翅目害虫(ハマキムシ類、チャノホソガ等)の行動抑制(交尾阻害)のため、黄色高圧ナトリウムランプを設置する。
	雑草	マルチ・敷草・機械除草	定植時のマルチやうね間の機械除草、敷草等の除草剤を使用しない雑草管理対策を実施する。

	管理項目		管理ポイント
	対象	技術	
化学的防除	農薬の使用全般 (共通)	薬剤の選択	個々の農薬の効果特性を理解し、適切な農薬を使用する。 農薬を使用する場合には、同一成分や同一系統の農薬を繰り返し使用しない。さらに、当該地域で抵抗性が確認されている農薬は使用しない。
		散布量の決定	十分な薬効が得られる範囲で最小の散布量となる適切な散布方法を検討し、決定する（薬剤散布後の残液が出ないように薬液量を調整する）。
		散布方法	農薬散布を実施する場合には、ドリフトレスノズルを使用する等、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。防除は早朝か夕方の無～弱風時を選んで行う。
		散布後の処理	散布器具、タンク等の洗浄を十分に行い、残液やタンクの洗浄水は適切に処理し、河川等に流入しないようにする。
	雑草	除草剤の選択	除草剤を使用する場合には、雑草の発生状況や草種を確認し、適切な剤を選択する。
その他	作業日誌		各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。
	研修会への参加		県や農業協同組合が開催するIPM研修会や防除研修会等に参加する。